

## チベット・アムド地域における漢族家庭の言語使用状況\*

— 青海省黄南藏族自治州尖扎県康楊鎮カルマタン村の王徳有の家庭を事例に —

周 楊 措

博士課程後期課程

広島大学大学院国際協力研究科

〒739-8529 広島県東広島市鏡山1-5-1

zhouyangcuo@yahoo.co.jp

## 0. はじめに

中国青海省黄南チベット自治州尖扎県康楊鎮カルマタン村（*Ch.*<sup>(1)</sup> 尕麻塘, *Tib.*<sup>(2)</sup> skar ma thang, 地図1と2を参照）は、チベット族を主とし漢族が雑居している村であるため、地元ではチベット村と呼ばれている。この村の漢族はチベット化の程度によって「チベット化している」、「半漢・半チベット」と「漢族のまま」の三つのグループに分けられる。本稿は、カルマタン村の漢族家庭の言語使用状況を考察するため、「漢族のまま」残っている王徳有の家庭を事例に、世代ごとに漢語とチベット語をどのように使い分けているのか。そして、なぜ世代ごとに言語使用が微妙に移り変わっていくのか、その理由を明らかにし、チベット村の多言語使用の過去と現在を解明する。

筆者はこの村で、2016年8月と9月の二か月間にわたりフィールド調査を行った。その際主に行ったのは、

聞き取り調査と参与観察、アンケート調査である。また、ビデオカメラとICレコーダーを通してデータも収集した。本稿で使う個人名は、本人から承諾を得たものである。

第1節では、調査地となる康楊鎮とカルマタン村の概要を述べ、さらに、カルマタン村の漢族の移住の歴史的過程を述べる。第2節では、カルマタン村の言語使用状況に注目し、この村でよく使われている4つの言語を紹介し、漢族家庭の言語使用について分析を行う。第3節では、カルマタン村の漢族家庭の特徴について、チベット化の程度に従い三つに分けて分析する。第4節では、カルマタン村の漢族家庭の一つである王徳有の家庭について、その基本データ、家族それぞれの言語能力と日常の言語使用について述べ、さらに、各世代の言語能力と言語使用について検討する。そして、第5節では本稿で述べてきたことをまとめる。



地図1. 黄南藏族自治州尖扎県



地図2. 黄南藏族自治州

(チョルテンジャブ 2014,105を基に筆者が作成)

## 1. 調査地の概要

### 1.1. 康楊鎮の概要

カルマタン村は康楊鎮の一村落である。この康楊鎮は黄河上流の黄南藏族自治州尖扎県の東北部に位置する小さな町である。県政府所在地であるマクタン (*Ch. 馬克唐, Tib. mar khu thang*) から23キロ離れ、最低海拔は1,960メートル、最高海拔は4,614メートルである。

康楊鎮は回族を主とする鎮であり、その回族が全人口の79%を占める。他にチベット族と漢族、少数の土 (トゥ) 族がいる。康楊鎮は面積35平方キロメートルを有し、13の村からなる。表1-1は、建国 (1949年) 以降における康楊鎮の名称の移り変わりを示したものである。この名称の変遷からも、建国前後から回族が主として暮らしている場所であることが分かる。

表1-1. 建国以降における康楊鎮の名称の推移

年度	名 称
1953	康揚家回族自治区
1956	康揚回族郷
1958	康加公社
1961	康揚公社
1984	康揚回族郷
1988	康楊鎮

出典：http://baike.baidu.com/link?url=XO5SipBOQt9UN1C4X1f (2016. 6)

康楊鎮は元朝の時代には、黄河対岸のチュンコル (*Ch. 群科, Tib. chu khor*) とともに軍の防衛線に位置し、イスラム教を信仰するモンゴル人 (*Ch. 托茂人, Tib. thor dmag, Lit.<sup>(3)</sup>*、分散している軍人) と漢人、

西域色目人から構成された軍隊が駐屯していたとされている。康楊鎮の名の由来は、鎮政府所在地の「康家 (カンジャ)」とそこから1.5キロメートルを離れている「楊家 (ヤンジャ)」の二か所の地名から付けられたものである。「康家」と「楊家」は50メートルの広さの谷に分布し、地理的には非常に近い。

康楊鎮に属する村は表1-2のようになる。「－」はその表記が存在しないことを表す。

### 1.2. カルマタン村の概要

#### 1.2.1. カルマタン村の位置づけ

康楊鎮政府で得たデータに従うと、現在カルマタン村は182世帯、そのうち漢族の家庭は29世帯となる。村の総人口は614人<sup>(5)</sup>。ただし、筆者が現地調査をしたとき、カルマタン村にはかなりの空家があった。空家について村人は、①耕地・家屋はそのままに、家族が皆村を出て尖扎県内の別の地域に移住した、②移住者が耕地・家屋を購入したもの、そこに住んでいない、③一年中夫婦とも出稼ぎに行き、春節にしか帰って来ないという3つの原因を述べている。

カルマタン村は、県政府所在地マクタンから康楊鎮までミニバスで40分、鎮から歩いて30分かかる。村の南部は回族の各巴灘村、北部は漢族が主となる楊家上庄村と接し、普段は民族間の共通語として漢語青海方言<sup>(6)</sup>とチベット語アムド方言が使われている。伝説によると、元朝の時代モンゴル人が一時的にこの村を占領したことがあり、そのときモンゴルのゲルが夜空の星の数ほどたくさん張られていたので、カルマタン (*skar ma thang, Lit. 星平地*) と呼ぶようになったと言われている。

伝統的にカルマタン村は、表1-3のように三つ、ラディ (*lha sde*) とホンツァン (*dpon tshang*)、ジョンジョン (*cong cong*) に区分される。

表1-2. 康楊鎮に属する村とその民族構成<sup>(4)</sup>

チベット語表記	漢語表記	民族	世帯 (戸)	人口 (人)	康楊鎮政府所在地までの距離 (km)
－	巷道	回族	285	1,041	0.7
rgya bya tshang	上庄	回族, チベット族, 土族, 漢族	157	587	2.5
sgar sgo	寺門	回族	106	495	2.5
shar sgo	東門	回族	187	821	2.1
mkhar thog	城上	回族, 漢族	114	468	1.5
gad khug	崖湾	回族	174	644	1.0
ske chu	格曲	回族, チベット族	264	1,060	8.0
gram gzhung	河灘	回族	140	570	3.0
bye ma la	沙力木	回族	260	1,426	0.6
tsong 'dzugs ra	宗子拉	回族	224	980	1.8
skar ma thang	尕麻塘	チベット族, 漢族, 回族	182	614	4.5
zhis lin	西么拉	チベット族, 回族	158	590	2.5
sha bzang thang	夏藏	回族	48	273	15

出典：『2016年康楊鎮城郷居民基本医療保険参保任務分解表』を基に筆者が作成

表1-3. カルマタン村の構造

集 団	ラディ	ホンツァン	ジョンジョン
民主改革 <sup>(7)</sup> (1958年) 前の位置づけ	ゲラ <sup>(8)</sup> のために働く	自立していた集団	自立していた集団
民族と世帯数	チベット族: 90世帯 漢族: 12世帯	チベット族: 20世帯 漢族: 9世帯	チベット族: 21世帯 漢族: 8世帯
地理	村の中心	回族の各巴灘村と接している	楊家上庄村と接している

ラディ (lha sde) は、ラ (lha) 「神様」とディ (sde) 「村」から構成される語である。Zhang (2010, 3084) では、「寺院に属する部衆・民衆<sup>(9)</sup>」と解説している。ホンツァン (dpon tshang) のホン (dpon) は「王」の意味であり、ツァン (tshang) は「家」の意味である。Zhang (2010, 1642) によれば「官家<sup>(10)</sup>」と解説している。今、ホンツァンは地名となっている。ジョンジョン (cong cong) の意味は不明であり、その出自はチベット語ではないと思われる<sup>(11)</sup>。

ただし、カルマタン村の民族区分は曖昧である。例えば、調査対象である王徳有の家族の場合、筆者が実施したアンケート調査に従うと、戸籍上の民族はみな「漢族」となる。しかし、康楊鎮政府のデータでは王徳有はチベット族であり、他はみな漢族となる。その一方で、孫の一人は、自ら戸籍上はチベット族であると語っている。

この三つの集団がカルマタン村として一つに統合されたのは民主改革 (1958年) 以降のことと思われる。「ラディ」は上述のように、民主改革前は寺院のために働く民衆あるいは集団名であった。「ゲラ」はラマ (高僧) の出身家庭のことで、村内で比較的高い身分であり、大きな耕地と何人かの使用人を持っていた。これらの身分は民主改革後なくなり、すべて平等になった。

表1-3のホンツァンと接する回族の各巴灘村は20年前、「康家」から移住した15世帯の回族から成り立っている。行政上の区分では表1-2の民族構成からも分かるように、カルマタン村に属している。しかし、村人の間では各巴灘村は別の村と意識されている。「各巴灘」は、チベット語ではグワタン (ko'u ba thang) といい、かつてゲラ・ゴンパの所有地であった。

### 1.2.2. カルマタン村の歴史的背景

Dkon mchog bstan pa rab rgyas, Brag dgon pa (1982, 292) には、グワ・ゴンパの歴史を記した部分でカルマタンという名は出てくるが、それだけである。Snying lcags (2011, 488) と尖扎県に属する各村の歴史を記した Dbang grags (2011, 261) を見ても、1.2.1 節で述べたカルマタン村の名の由来が書かれているにすぎない。

以下、ジョンジョン・ヤカ<sup>(12)</sup> のD氏 (60歳代 男) と、ジョンジョン・マカのR氏 (70歳代 男)、ホンツァンのD氏 (50歳 男)、ヨンズ・ジャ<sup>(13)</sup> のO氏 (70歳代 男) と、元村長N氏 (70歳代 男) から聞き取り調査で得た資料に基づき、カルマタン村の漢族の移住

過程をまとめる。

### 1.2.3. 漢族の移住過程<sup>(14)</sup>

カルマタン村に居住している漢族の移住は、主に2つの時期に分けられる。1918年西寧盆地東部の楽都からカルマタン村へ1家族が移住してきた。移住当初、彼らはゲラの「ヨンズ・ジャ」(家内労働者) として生活していた。「ヨンズ・ジャ」は漢語の「院子 (ヨング)」と、「漢」あるいは「漢族」を意味するチベット語の「ジャ」から構成され、「庭の管理をする漢族」を意味する。

「ヨンズ・ジャ」はカルマタン村で一番歴史の古い漢族家族であり、漢族家庭の7割と親戚関係がある。他の3家族は1950年代末の人民公社・生産隊を組織した時代に移住してきた。カルマタン村は人民公社<sup>(15)</sup>を組織したとき、村の畑が広すぎて労働力が足りず、村の周辺の農地を同じ生産大隊に属する楊家郷に耕作を依頼した<sup>(16)</sup> が、なお労働力が不足がちであったため、外部からの移民を歓迎した。漢族3家庭はその時移住してきたという。これら漢族の家庭は、1918年移住してきた漢族と異なり、農耕のかたわら大工、鍛冶屋として家計を維持していた。今日、木を伐採することは違法となるうえに、木材で家を建てる家庭が少なくなっているので、大工は廃業している。鍛冶屋は今でも金属製の門やストーブなどを作っている。

## 2. カルマタン村の言語使用

### 2.1. 4つの言語

カルマタン村で日常使用されている言語は、①チベット語アムド方言 (厳密には後述するようにアムド方言の中でも農耕地帯下位方言の低地方言)、②アムド標準チベット語、③漢語青海方言、④漢語普通話である。順に説明をしていく。

まずは、①チベット語アムド方言である。チベット語アムド方言は、牧畜地帯方言と農耕地帯方言の二つの下位方言に分けられる<sup>(17)</sup>。そして、農耕地帯方言は、さらに半農半牧の山地 (ri ma) 方言と農耕地帯の低地 (chu ma) 方言に分けられる。山地方言はチベット族が集中し、漢族など他民族の多い町から離れているところで話されているため、他民族語からの借用語が少ない。他方、低地方言は漢族・回族との接触が多いため、漢語青海方言からの語彙の借用語がチベット語に浸透している。カルマタン村で使われているのは、



これらのうち、農耕地帯下位方言の低地方言である（以下ではこの低地方言のことを単にチベット語アムド方言と呼ぶ）。

次は、②アムド標準チベット語である。このアムド標準チベット語は、現在青海省テレビのチベット語番組で用いられているチベット語のことであり、アムド地方では標準語として認められている。アムド地域のチベット語のニュース、チベット語のドラマ、民族学校の教授用語、会議など公式の場で使う言語となっている。発音は半農半牧方言に近い。

カルマタン村では、一般にはチベット語アムド方言を使うが、半農半牧地方から移住してきた人、民族学校の教育を受けた人はアムド標準チベット語を使っている。最近、寺院や民族中学校などは、民族語の美しさを守ろうとしてアムド標準チベット語の使用を提唱しているため、漢語青海方言・漢語普通話の借用語を意識的に使わないようにしている人も少なからずいる。

次は、漢語青海方言である。この漢語青海方言は、カルマタン村の少数の漢族が使い続けている。カルマタン村の漢族は長い期間チベット族と一緒に居住してきたため、漢語青海方言を基本としてチベット語アムド方言からの借用語の使用が多い。他の漢語青海方言話者からは、カルマタン村の漢語青海方言は「変わっている漢語青海方言」と受け取られている。

漢語普通話は最近になって、カルマタン村で使われるようになった。これはテレビの普及と学校教育によって、年少者の普通話が巧みになったためである。小学生は漢語普通話のアニメを見ることが多いので、互いに漢語普通話で話しながら遊んでいる。また漢語普通話は携帯電話のメールを送るときは、若者間の交流手段ともなっている。

現時点では、カルマタン村全体における言語使用頻度は、チベット語アムド方言＞アムド標準チベット語＞漢語青海方言＞漢語普通話といった一方向性がある。

## 2.2. 漢族の言語使用<sup>(18)</sup>

カルマタン村の漢族家庭は29世帯である。これらの家庭はチベット化（3節で述べる）の程度によって、家庭内の言語もチベット語アムド方言か漢語青海方言かになり、また二言語を混ぜて使う現象も普通に見られる。

この村の漢族たちが家庭内でどの言語を使い、その言語を使うときその言語を使っているという意識があるのかどうかをはっきりさせるため、筆者はまずアンケート調査を通して家庭内で用いる言語を把握した。そして、次に「A：いつも使っているチベット語アムド方言の中に青海方言は入っていますか」、「B：いつも使っている青海方言の中にチベット語アムド方言は入っていますか」という二つの質問を用いた。この質問を用いる理由は、これらの家庭はチベット化の程度が多少異なり（3節を参照）、それと共に民族の所属意識も異なるため、家庭内の言語使用は直接聞くこと

はできないからである。そのため、上の二つの質問を用い、そのどちらを答えたかを表2-1にまとめた。カルマタン村の3つの集団によって、その使用状況にも違いがあるため、表2-1には3つの集団ごとに整理してある。

表2-1. カルマタン村の漢族の家庭内の言語使用

集 団	家庭内の言語使用			
	A		B	
	入ってない	入っている	入ってない	入っている
ホンツァン	2世帯	0世帯	4世帯	3世帯
ラディ	5世帯	6世帯	0世帯	1世帯
ジョンジョン	0世帯	4世帯	0世帯	4世帯

まず、いつも使っているチベット語アムド方言に漢語青海方言が入ってないというホンツァンの2世帯はラディと接するところに居住し、純漢族の家庭である。また、チベット族の集中度が高いラディの漢族家庭のうちの5世帯はチベット語アムド方言を選んでいる。

いつも使っているチベット語アムド方言に漢語青海方言が入っているというのはラディ6世帯と、ジョンジョン4世帯である。ラディの6世帯はいずれも高齢者がいる家庭であり、もともと漢族だったという所属意識ははっきりしている。ジョンジョンの4世帯はラディの漢族ほどチベット語アムド方言が流暢ではないが、若い世代から母語がチベット語アムド方言となり、家庭内でチベット語アムド方言しか使っていないという。

漢族家庭で漢語青海方言のみを使う家庭はホンツァンでの4世帯だけであり、これらの家庭は村境に居住し、家族全員漢族であるため、家庭内では漢語青海方言しか使っていないという。「孫を村の小学校に入れようとしたが、チベット語アムド方言が全然聞き取れないという理由で、学校から入学を断られた」と王徳有の夫人が話してくれた。

漢語青海方言にチベット語アムド方言が入っているというのはホンツァン3世帯と、ラディ1世帯、ジョンジョン4世帯である。まずホンツァン3世帯の共通点は家族でチベット語アムド方言ができない人がいるため、家庭内では主に漢語青海方言を使っている。ラディの1世帯もホンツァンと同じ理由であった。ジョンジョンの4世帯のうち、2世帯は高齢者のいる家庭であり、その高齢者の民族意識が強く、残りの2世帯は周辺の村人との接触が少ないが、家族全員が漢語青海方言とチベット語アムド方言が自由に切り替えられ、家庭内では主に漢語青海方言を使っているという。

要するに、カルマタン村において漢語青海方言だけを使っているのは4世帯だけであり、ラディの漢族を主として17世帯の漢族の母語はすでにチベット語アムド方言となっており、漢語青海方言を話せる人は高齢者に限られている。彼らの家庭内の言語使用は、民族

学校出身の子供はアムド標準チベット語アムド方言を使い、教育を受けたことがない家庭の子供はチベット語アムド方言に漢語青海方言を混ぜて使っている。

漢族のチベット化が著しいのに、なぜホンツァンの漢族の中に漢語青海方言だけを用いる家庭が存在するのか。その理由はホンツァンの家屋がやや離れた場所に集まっていること、そして婚姻関係も村内ではなく楽都など他地域の漢族と結んでいることにある。

### 3. 漢族家庭の特徴

カルマタン村の漢族家庭は上述したように各家庭によって、家庭内の言語使用がそれぞれ異なり、その原因として居住位置と婚姻関係を挙げていた。言い換えれば、チベット族との接触によるチベット化に関連しているといえよう。ここで、まずチベット化について定義しておく。「チベット化」というのは、先祖が漢族である家庭が、チベット族と族際結婚及び雑居によって、言語・生活習慣・民族意識がチベット族と異なることがないところまで至っている民族状況を指すことと定義する。

本稿で取り上げたカルマタン村の漢族は長期間チ

ベット族と居住しているので生活習慣的には村のチベット族とほとんど異なるところがない。そのため、本稿では漢族家庭のチベット化を述べる時、母語がチベット語アムド方言であるかどうか、または、民族意識的にチベット族であるかどうかを基準にしてチベット化の程度を分けて述べる。例えば、嫁がチベット族である場合、生まれた子の母語はチベット語アムド方言であるのは言うまでもないが、漢族の苗字を継承している家庭だと、漢語とチベット語の両方の名前をつける家庭が多い。しかし、若い世代の民族意識は曖昧である。一方、祖父母の時代からチベット族との族際結婚を行っていた家庭だと、漢語が流暢に話せないうえ、漢族の苗字継承も失っている家庭もいるので、若い世代にもチベット語の名前しか付けていない。こういう家庭の若者は先祖が漢族だったということが分かってない場合もある。

カルマタン村の漢族家庭の特徴は2016年の8月と9月の調査期間を使って、アンケート調査で各家庭の基本状況を把握した後、聞き取り調査及び参与観察によって、データの正確性を高めるように努力した。そして、漢族家庭の特徴をまとめると、チベット化の程度により表3-1のように3つに分けられる。

表3-1. 漢族の同化程度

同化程度	特 徴	世帯数	所 在 地
1) チベット化している	<p>高齢者がいる家庭</p> <p>①高齢者の民族籍は漢族のままであるが、民族意識的にはチベット族である。若い世代は民族籍も民族意識もチベット族である。</p> <p>②名前は、高齢者は漢語であり、若い世代はチベット語である。</p> <p>③嫁はチベット族である。</p> <p>高齢者がいない家庭</p> <p>①民族籍がチベット族になっていて、「漢族」と言われると、差別されていると怒る。</p> <p>②名前は家族みなチベット語の名を付けている。</p> <p>③嫁はチベット族である。</p>	11戸	ラディ
2) 半漢・半チベット	<p>①高齢者の民族籍は漢族のままで、民族意識的にも漢族である。若い世代の民族籍はチベット族で、民族意識は「ジャマウォ（以下で議論する）」である。</p> <p>②名前について、男の子は漢語とチベット語の二つの名前を持っている。</p> <p>③嫁はチベット族である。</p>	12戸	ジョンジョン・ホンツァン・ラディ
3) 漢族のまま	<p>①民族籍は漢族のままである。</p> <p>②名前は、家族みな漢語の名前である。</p> <p>③嫁は漢族である。</p>	6戸	ホンツァン・ジョンジョン

以下、特徴について詳細に述べる。各世代の分け方は、祖父母は第一世代、両親は第二世代、子どもは第三世代として統一する。

1) チベット化している家庭は、言語的にも文化的にもチベット族と異なるところがなく、「漢族」であることを意識的に隠したいという気持ちを持っている家庭である。これらの家庭は高齢者がいるかどうかで、

さらに二つに分けることができる。高齢者がいない家庭は民族籍も民族意識も完全にチベット化している。これらの漢族の家庭内言語はチベット語アムド方言であり、若い世代は漢語青海方言が話せない。高齢者は子供のとき漢語青海方言とチベット語アムド方言を使っていたため、発音に違和感はない。各家庭の共通点としては、嫁が全部チベット族であることが挙げら

れる。嫁の存在で家庭内の言語はチベット語アムド方言になったうえ、子供にもチベット語の名を付けている。漢族の「苗字」継承について、「名前よりも子供の健康が重要だから、ラマに頼んで良い名前をもらった」と一致した答えが出る。第一世代は、漢族の名と漢族の民族籍であり、両親とも漢族だったが、チベット村出身なので、チベット族と違うところがないという。第二世代は漢語とチベット語の二つの名前を有し、民族籍はチベット族になっている。チベット語アムド方言の他に漢語青海方言が聞き取れるレベルであり、民族籍について、名前も戸籍上の民族もチベット族になっているという。第三世代は、名前はチベット語であり、母語としてチベット語しか話せない。民族籍について、「チベット族です」と躊躇なく答える。

完全にチベット化している漢族の家庭は、上述のような高齢者がいない家庭であり、家族全員が「チベット族」であるという意識が強い。外部の漢族のことを「ジャゲン (rgya rgan)」と現地で漢族を差別する言い方を使い、自分がチベット族であることを強調する。チベット族の集中度が高いラディに居住している漢族は、周辺のチベット族からの影響で、完全にチベット化あるいは、間もなくチベット化する家庭である。今「チベット族」になっていることを強く主張し、村から出ると意識的に「漢族」の身分を隠す行為がある。

2) 半漢・半チベットの漢族の家庭は、ジョンジョンの6世帯とラディの1世帯、ホンツァン5世帯である。1) と異なるのは、第三世代の母語はチベット語アムド方言であり、祖父母には漢語青海方言を使い、両親にはチベット語アムド方言を使うという点である。漢語青海方言とチベット語アムド方言の使用率は家庭によって異なる。第一世代と第二世代の言語能力は1) の第一世代と第二世代と同じレベルだが、家庭内では第一世代は、息子と孫には漢語青海方言を使用している。なぜ家庭内の言語が漢語青海方言のまま保っているのか。これについてジョンジョンのZH(60代 女)は「私と旦那は漢族だが、孫たちがジャマウォになっている。でも、やっぱり漢族だから家庭内では漢語青海方言で話している。」と述べている。

ジャマウォという用語について説明しておきたい。「ジャマウォ」の「ジャ (rgya)」は「漢人・漢族」を表し、「マ (ma)」は接続詞を表し、「ウォ (bod)」は「チベット・チベット族」を表す。つまり、チベット化した漢族、すなわち、純粋ではないチベット族を表す蔑称である。「ジャマウォ」という名称は自称より他称としてよく使われている。康楊鎮は多民族が雑居している地方だが、どの民族出身なのかははっきり分けられている。こうした社会背景のもとで、漢族とチベット族のもとで生まれた子供は「チベット族であるが、本当のチベット族ではない」という区別の意味が入っている。

また、ジョンジョンでは、第三世代が男子の場合、漢語とチベット語の二つの名前を持っている。漢語名

は家系を伝承するために祖父母から付けてもらった名前であり、チベット語の名は健康などを祈ってラマからもらった名である。名前の使い方として、家庭内では漢語名を使い、学校ではチベット語の名を使っている。

半漢・半チベットの家庭の特徴として、第三世代は二重の民族性が見られるが、第一世代は自分の帰属意識を強調するため、家庭内では漢語青海方言を使い続け、第三世代に対しても漢族としての姓の伝承を望んでいることがわかる。第二世代の民族籍はチベット族になっているが、日常はチベット語アムド方言と漢語青海方言、漢語普通話の多言語を併用している。自らの民族についても、話し相手によって、漢族と答えたりチベット族と答えたりしている。第一世代ほど民族の帰属意識は強くないといえる。

2) は1) との共通点が多いが、チベット化を積極的に受け入れていないところが異なる。これはジョンジョンとホンツァンの居住区域の違いと関係があることを分かる。ただ、それよりもそれぞれの帰属意識がもっと重要な原因であると考えられる。

3) 漢族のままの家庭は、ホンツァン4世帯とジョンジョン2世帯である。ジョンジョンの2世帯は、20年前に隣人のチベット族と衝突があり、ジョンジョンのチベット族から孤立している。ここでは主にホンツァンの漢族家庭について述べたい。民族的にも、言語的にも変化がなかった原因として考えられるのは、ホンツァンの漢族は漢語青海方言を共通語として使用している回族の各巴灘村と接し、特に用事がないときはチベット族と付き合わないことが挙げられる。ホンツァンにもチベット化している家庭があるが、いずれもラディとホンツァンが接するところに居住している。つまり、「漢族のまま」残っている漢族の家庭は、カルマタン村の村境に住み、人間関係が村内部より回族の各巴灘村により近いといえよう。そして、楽都との親族とも繋がりが強く、経済的には村の他の漢族家庭より豊かである。村人はこれによって漢族の嫁をもらえているという。これらの家庭の特徴は、第一世代と第二世代（嫁は含まない）は漢語青海方言とチベット語アムド方言の両方の言語ができるが、第三世代は漢語青海方言、または漢語普通話しかできない。「漢族のまま」残っている家庭は、地理的、親族との繋がりが強いほか、経済的にも2) の漢族よりは豊かであるという特徴がある。

上述したように、チベット化の程度によって、各グループの話せる言語と、母語として認識している言語に異なる点が見られ、その言語の変化は表3-2のようになる。「+」は話せる言語を表し、「⊕」は母語を表す。「-」はその言語が話せないことを表す。



表3-2. 各グループ及び各世代の言語使用

		チベット語 アムド方言	漢語青海方言
①チベット化している	第一世代	+	⊕
	第二世代	⊕	—
	第三世代	⊕	—
②半漢・半チベット	第一世代	+	⊕
	第二世代 <sup>(19)</sup>	+	⊕
	第三世代	⊕	+
③漢族のまま	第一世代	+	⊕
	第二世代	+	⊕
	第三世代	—	⊕

#### 4. 王徳有家の事例

##### 4.1. 王徳有家の基本データ

王徳有の家庭は、もともとはゲラの「ヨンズ・ジャ」の子孫であり、王徳有は漢民族であることを明確に意識している。村内でも「純漢族」の家庭として認められている表3-1の3)「漢族のまま」に属するが、その妻王米姐は表3-1の2) ジャマウォを自称し、自ら単純な漢族ではないという。その一方で、長男は漢族という民族意識を持っており、父の影響が強いといえよう。表4-1に、王徳有の家庭における基本状況を記しておく。

表4-1. 王徳有の家庭

	年齢	戸籍上の民族	最終学歴と就学状況	読み書きのできる言語
王徳有	72歳	漢族	民族小学校	チベット語
夫人	69歳	漢族	未就学	無
長男	37歳	漢族	民族中学校	漢語・チベット語
嫁	38歳	漢族	未就学	無
長女	16歳	漢族	高校一年生 (回族学校)	漢語
次女	13歳	漢族	六年生 (回族小学校)	漢語
三女	9歳	漢族	三年生 (回族小学校)	漢語

出典：2016年8月と9月の聞き取り調査に基いて筆者が作成

以下、王徳有の家族全員の言語使用について聞き取り調査で得た情報に従いまとめる。

##### (1) 王徳有（72歳）

王徳有の母語は漢語青海方言である。両親とも漢族であり、家庭内の言語は漢語青海方言であった。チベット語アムド方言は小さい時から話せた。両親からチベット文字を学んだ方が良いと言われて村の小学校に通ったので、チベット文字の読み書きができる。漢語は自分の名前が読み書きできる程度である。

##### (2) 夫人（69歳）

同じチェンツァ県に属するチベット族ガブク村の漢族家庭の出身である。しかし、夫人の母はチベット族であり、小さい時はチベット語と漢語の両方の名前を持っていた。漢族の家庭に嫁いってから漢語の名しか使っていない。

夫人の母語はチベット語アムド方言であり、漢語青海方言も小さい時から話せた。民族意識は「ジャマウォ」である。家庭内では、息子の嫁と孫たちがチベット語アムド方言が話せないで、漢語青海方言で話しているが、家庭外ではチベット語アムド方言を使い、知らない人にもチベット語アムド方言で話す。

##### (3) 長男（37歳）

漢語青海方言もチベット語アムド方言も小さい時から話すことができる。母語は漢語青海方言である。家庭内の言語は漢語青海方言だったが、ある時から自分の話すことばがチベット語アムド方言になったという。民族小学校に通うようになってから、クラスメートからの影響と、また休みに村のチベット族の子供たちと家畜を山に放牧するので、チベット語アムド方言を使う時間が漢語青海方言より長かったのが原因という。

民族小学校は、家から通ったため、たまに家でもチベット語アムド方言を使うようになった。民族中学校時代は寄宿制学校なのでチベット語を使い、青海方言は普段使わなかった。民族中学校を卒業したあと、家でもチベット語アムド方言をよく使うようになった。漢語青海方言は家庭内と、同村の漢語青海方言を使い続けている親戚に対して使っている。

##### (4) 嫁（38歳）

嫁は漢族の村出身であり、母語は漢語青海方言である。結婚当初、チベット語は一言も話せないし聞き取りもできなかった。今、簡単な会話ならば聞き取れる。チベット族が相手の時も、青海方言で返事をしても相手は分かるため、チベット語は話せなくても問題がない。

##### (5) 孫たち（16歳、13歳、9歳）

三姉妹は漢語青海方言を母語としている。チベット語の使用について、孫（長女）と二人の妹の言語の能力に少し異なる点がある。孫（長女）は普段、漢語青海方言と漢語普通話を使い、チベット語アムド方言は全然使ったことがないという。孫の次女と三女は隣人のチベット族の子供とたまに遊ぶので、漢語普通話で通じない時は片言のチベット語アムド方言で交流している。家庭内でも父に対してたまにチベット語アムド方言で話している。学校では漢語普通話を使っているので、家庭外では漢語青海方言よりも漢語普通話を使うことが多い。

#### 4.2. 王徳有家の三世代の言語使用

王徳有家の三世代における言語使用状況をはっきりさせるため、家族全員に、家庭内は祖父母、両親と兄弟、親戚、そして家庭外は友達、普通の人、知らない人に分け、話し相手によってどの言語を用いるか聞き取り調査を行った。

表4-2は第一世代である王徳有とその妻が、自分の親戚と家庭外の人に、どの言語を用いるのかを整理したものである。表4-2の「A」は漢語青海方言、「B」はチベット語アムド方言、「C」は漢語普通話、「―」はその話しかける対象が存在しないことを表す。

表4-2. 第一世代の言語使用

話しかける対象		王徳有	夫人
家庭内・親族	祖父・祖母 <sup>(20)</sup>	A	A B
	両親	A	B
	配偶者	A B	A B
	兄、姉	A	B
	弟、妹	―	B
	漢族のままの親族	A	A
	チベット化している親族	B	B
家庭外・他人	チベット族の親友	B	B
	漢族の親友	―	―
	チベット族の普通の友達	B	B
	漢族の普通の友達	―	―
	康楊鎮町の店員	A B C	A B
	知らない人	A B	A B

王徳有の家庭内の共通言語は漢語青海方言である。夫人は祖父母と王徳有には漢語青海方言を使い、彼女の親族にはチベット語を良く使っていたという。それは、夫人が「ジャマウオ」であることと関係がある。王徳有夫妻に、どのように言語を使い分けるのか聞いたところ、「家庭外では互いにチベット語アムド方言で声をかける。それは、外に出るとみなチベット族だから。もし、他の人がおらず、二人だけであつたら、漢語青海方言で声をかけるときもある」という。そのため、表4-2では、配偶者の欄のBはゴチックにしている。王徳有はゲラの「ヨンズ・ジャ」の子孫として、カルマタン村に多くの親族がいる。その中には王徳有の家庭のように「漢族のまま」残っている家庭もあるし、「チベット化」している家庭も少なくない。そのため、王徳有が親族に、漢語青海方言とチベット語アムド方言両方とも使用することは予想できることである。そして、二人ともチベット族村出身なので、友達にはチベット族である。友人には、漢語青海方言がわかる者でも、チベット語アムドを用いる。なお、王徳有は買い物するとき、漢語普通話も使用している。

表4-3は、第二世代である長男と嫁が、自分の親戚と家庭外の人に、どの言語を用いるのかを整理したものである。表4-3の「A」は漢語青海方言、「B」はチベット語アムド方言、「C」は漢語普通話、「―」はそ

の話しかける対象が存在しないことを表す。

表4-3. 第二世代の言語使用

話しかける対象		長男	嫁
家庭内・親族	祖父・祖母	A	A
	両親	A	A
	配偶者	A	A
	兄、姉	A	A
	弟、妹	―	A
	漢族のままの親族	A	A
家庭外・他人	チベット化している親族	B	A
	チベット族の親友	B	―
	漢族の親友	―	A
	チベット族の普通の友達	B	A
	漢族の普通の友達	A	A
	康楊鎮町の店員	A B C	A
	知らない人	A B	A

表4-3から、長男夫妻の家庭内の言語は漢語青海方言であることが分かる。前述したように長男はチベット語アムド方言と漢語青海方言のバイリンガルであるから表4-2の王徳有夫妻と同じように親族には、漢語青海方言とチベット語アムド方言の両方を使用している。家庭外の言語使用を見ると、長男は話し相手によって言語を選択しているが、長男の夫人は漢語青海方言しか話せないという理由で、話し相手の民族を問わず全て漢語青海方言を使用している。また、長男は出稼ぎ等で外に働きに行くため、漢族と回族の友達には漢語青海方言を使用している。そして、王徳有と同じように買い物の時には漢語普通話も使用している。

表4-4は、第三世代である三姉妹が、自分の親戚と家庭外の人に、どの言語を用いるのかを整理したものである。表4-4の「A」は漢語青海方言、「B」はチベット語アムド方言、「C」は漢語普通話、「―」はその話しかける対象が存在しないことを表す。

表4-4. 第三世代の言語使用

話しかける対象		孫 (長女)	孫 (次女)	孫 (三女)
家庭内・親族	祖父母	A	A	A
	両親	A	A	A
	配偶者	―	―	―
	兄、姉	A	A	A
	弟、妹	A	A	―
	漢族のままの親族	A	A	A
	チベット化している親族	A	A	A
家庭外・他人	チベット族の親友	―	A B	A B
	漢族の親友	A C	A	C
	チベット族の普通の友達	―	―	―
	漢族の普通の友達	A C	A	C
	康楊鎮町の店員	C	C	C
	知らない人	A C	A C	A C



三姉妹も家庭内では漢語青海方言を使っている。孫（次女）と孫（三女）は話し相手によって漢語青海方言に片言のチベット語アムド方言を混ぜて使うときもある。それは隣人のチベット族の子供とよく遊ぶので、流暢ではないもののチベット語アムド方言がわかるため、たまに祖父母と父親にも漢語青海方言にチベット語アムド方言も少し混ぜて話すことがある。孫（次女）と孫（三女）は互いに片言のチベット語アムド方言で話して遊ぶという。

家庭外の言語使用は、孫は3人とも話し相手によって言語の選択をしている。孫（長女）は親友と友達に漢語青海方言と漢語普通話というところが若干異なるが、チベット族の友達がいなかったため、チベット語アムド方言は聞き取れるぐらいで話せない。

孫（次女）と孫（三女）は片言のチベット語アムド方言が話せる。この二人の学校内での言語使用は、「楊家」の回族小学校に通っているの、教室内では漢語普通話、外では漢語青海方言という。これは、中国全土において普通学校での教授用語は漢語普通話に決められているからである。

康楊鎮町の店員に対しては、三人とも漢語普通話を使用し、知らない人に対して漢語青海方言か漢語普通話を使っている。

#### 4.3. 考 察

第一世代の王徳有は母語の漢語青海方言の他に、チベット語アムド方言、他にも漢語普通話も使う。彼の妻の母語はチベット語アムド方言であり、他に漢語青海方言が話せる。第二世代の長男の母語は漢語青海方言であり、チベット族の村出身のうえ民族学校に通ったことがあるのでチベット語アムド方言、漢語普通話に堪能である。嫁は漢族村の出身なので、漢語青海方言しか話せない。第三世代の三姉妹は家庭内では漢語青海方言の使用頻度が高いが、家庭外では漢語普通話を頻繁に使っている。

この三世代の母語と言語能力は表4-5のようになる。表3-2と同様に「+」は話せる言語を表し、「⊕」は母語を表す。「-」その言語が話せないことを表す。

表4-5. 三世代の言語能力

	チベット語アムド方言	漢語青海方言	漢語普通話
王徳有	+	⊕	+
夫人	⊕	+	-
長男	+	⊕	+
嫁	-	⊕	-
孫	-	⊕	+

王徳有と長男の母語は漢語青海方言であるが、チベット語も話せるほか、二人とも民族学校に通ったことがあるため、チベット語の読み書きもできる。世代によって言語能力に差がある原因として考えられるのは以下のようなことである。

第一世代の王徳有夫婦はチベット村出身である。二人とも1959年の青海省チベット地域の民主改革を体験し、人民公社・生産隊時代、チベット族と共同で集団労働に従事していたため、チベット語アムド方言を流暢に話することができる。第二世代の長男は人民公社・生産隊の時代が終わった後の伝統回帰の時代に生まれた。彼は子供時代に放牧を通じて行なったチベット族との交流と、民族中学校での教育を受けた経験により、漢語青海方言よりもチベット語を主として用いる。しかし、漢族村出身の嫁はチベット族との交流を持たなかったため、漢語青海方言を主として用いる。第三世代の三姉妹は、市場経済の浸透とともに学校教育とテレビの普及で漢語普通話が話せるようになった。

各世代の言語使用を、使用度の高い順に書くと表4-6のようになる。

表4-6. 王徳有家庭の各世代の言語使用の優先度

第一世代	王徳有	家庭内	漢語青海方言＞チベット語アムド方言
		家庭外	チベット語アムド方言＞漢語青海方言＞漢語普通話
	夫人	家庭内	漢語青海方言＞チベット語アムド方言
		家庭外	チベット語アムド方言＞漢語青海方言
第二世代	長男	家庭内	漢語青海方言＞チベット語アムド方言
		家庭外	チベット語アムド方言＞漢語青海方言＞漢語普通話
	嫁	家庭内	漢語青海方言
		家庭外	漢語青海方言
第三世代	孫（長女）	家庭内	漢語青海方言
		家庭外	漢語普通話＞漢語青海方言
	孫（次女・三女）	家庭内	漢語青海方言
		家庭外	漢語普通話＞漢語青海方言

表4-6から分かるように、王徳有家の第一世代と第二世代は言語の優先度から見ると、チベット語アムド方言・漢語青海方言・漢語普通話の順番である。しかし、第三世代はその逆になり、チベット語アムド方言の使用率はほぼゼロに近い。また、漢語普通話の使用率も第一世代と第二世代より高くなる傾向がある。それは、漢語普通話が教授用語となる学校教育が原因であることはいまでもなく、学年が高くなるとともに、漢語普通話の使用率が漢語青海方言より高くなることが予想される。

しかし、チベット語を使う環境が整っているのに、家庭内の言語はなぜ今チベット語アムド方言ではなく、漢語青海方言なのか。王徳有は「息子の嫁は化隆出身で、チベット語ができない。だから、家ではみんな漢語青海方言を使うようになった」と、目下のものであっても言葉を新来の人物にあわせる事実を述べている。

要するに、王徳有の事例が示すように、チベット族村の出身の漢族が多言語を併用することはよくある。しかし、家庭内の誰かが一つの言語しかできない場合、家庭内の言語は単一化する。また、若い世代は漢語青海方言と学校教育による漢語普通話を使い、チベット語アムド方言は簡単な会話しかできない。このように、ある一つの家庭において、時代によって言語使用状況に差がある原因として「嫁」の存在のほか、子供達の学校教育における漢語の使用及びテレビやラジオなどの電気製品の普及によって、村の中の言語使用にも影響を与えている。こうした言語使用背景も考えなければならない。

王徳有家庭の各世代の言語背景で述べたように、各世代によって他の村人との接触状況は異なって来ている。特に、近年人口増加が激しく、600人以上有する村として、以前のように村人全員知り合いではなくなっている。「カルマタン村ほど外へ働きに行っている村は見たこともない」と言われるように、カルマタン村は町に近いので、大人はほぼ毎日外へ働きに行っている。残りの子供は留守番として一日中テレビを見ているのが普通である。つまり、若い世代は家庭外で村人と接触する機会がほかの第一世代と第二世代より少なくなっている。

一方、2000年以降嫁いできた漢族の嫁が積極的に村の共通語であるチベット語アムド方言を学ばない原因としては、漢語青海方言或いは漢語普通話を使える村人が増えたという言語背景も考えなければならない。

## 5. まとめ

チベット族が主体になっているカルマタン村では、一般的にチベット語アムド方言を使うが、半農半牧地方から移住してきた人や、民族学校の教育を受けた人は、アムド地方で標準語として認められているチベット語も使っている。一方、この村は全村614世帯だが、

そのうち29世帯の漢族家庭は、チベット化の程度によって、チベット語アムド方言と漢語青海方言、漢語普通話の使用の状況が異なる。それは家族状況と各世代によって微妙に異なる。

その漢族29世帯のチベット化の程度は①戸籍上の民族、②名前の付け方、③嫁の民族の三つの点から区分すると、11世帯が完全にチベット化し、10世帯が「ジャマウォ」という民族意識を持っていた。「漢族のまま」残っているのは8世帯だけであり、その特徴としては、村の中心部からやや離れている場所に住んでいることと、嫁が第三世代の民族属性に直接影響を与えていることが分かった。

\*本稿は、2017年4月22日東京外国語大学本郷サテライトで開催された第71回多言語社会研究会(東京例会)で口頭発表したものを加筆修正したものである。

## 注

- (1) *Ch* は Chinese の略語である。
- (2) *Tib* は Tibetan の略語である。
- (3) *Lit* は literal の略語である。
- (4) 「巷道」以外の各村はチベット語の村名を有している。「西么拉」と「宗子拉」の語源は不明である。
- (5) カルマタン村の世帯について、康楊鎮政府に登録している世帯数と村人から得た世帯数と一致しないが、本稿では政府による統計をとった。
- (6) 漢語青海方言は、北方方言の西北方言に属する。主に、西寧方言と楽都方言二つに分けられる。西寧方言は、湟中、湟源、平安、大通、互助、門源、化隆、貴徳など、楽都方言は、民和、循化などで話されている(陳、李2012, 19)。青海省は、漢族とチベット族、モンゴル族、土(トゥ)族、回族、撒拉(サラル)族など多くの民族が雑居しており、民族語が漢語青海方言にかなりの影響を与えている。例えば、漢語青海方言の語順は漢語普通話のSVOとは異なりSOVである。
- (7) 1958年、青海省チベット地域では土地改革行なうとともに、「青海省チベット地域で長い歴史の間維持してきた万戸や千戸、百戸の各部族の政権や寺院の『政教合一』制度などを廃棄した。」(ガザンジェ2016, 29)
- (8) Pad ma rdo rje (1989, 166) には、sgar ba/spyi tshogs rnying bar bla chen dang dpon po 'dug sa'i khang ba'i ming ste/sgar ba/sgar kha zhes pa lta bu/ (ゲワ、あるいはゲカは1958年の民主改革前のラマや地主の家を指す。)現地ではゲラという。
- (9) Zhang (2010, 3084) には、lha sde/ sngar dgon pa khag gi khongs su gtogs pa'i sde 'bangs/ 寺庙部众。旧社会由各寺庙领主是所管百姓。(かつて各寺院の領主が管理された庶民。)
- (10) Zhang (2010, 1642) には、dpon tshang /dpon pa'i khyim / 官家、仕宦之家。(地主の家。)
- (11) 村人に聞いたが、分かる人はいなかった。
- (12) ヤカは上の意味であり、そのすぐ後に出てくるジョンジョン・マカのマカは下の意味である。
- (13) ヨンズ・ジャについては1.2.3節を参照のこと。

<sup>14)</sup> チベット族の移住の過程についても述べておく。カルマタン村へ最初に移住してきた家庭はジョンジョン・ヤカで、800年前化隆県のヒジャン村から移住してきた。当時、カルマタン村は誰も住んでない野原だったので、近くの楊家（ジャコル）の「王」という姓の回族と同じツォワとして関係を保っていた。ここのツォワ（tsho ba）というのは「部落・集落」の意味である。

その十年後ジョンジョン・マカが化隆県のラクマン村から移住してき、続いてホンツァンが移住してきた。ホンツァンがどこから来たのかは不明である。この3つの家族を中心として拡大し、今は5つのツォワに達している。元村長のN氏（70代 男）は、「小さいときカルマタン村には27世帯しかなかった」と言い、多くの世帯は生産隊時代に移住してきたという。また、今の各ツォワの世帯数について以下のように述べている。ホンツァンのツォワは5世帯、ジョンジョン・ヤカツァンは7世帯、ジョンジョン・マカツァンは17世帯、ラクツァン（ラクは高いところの意味）は26世帯、あと固有名を持っていない14世帯のツォワがある。他の世帯は、ツォワが持っていない、親族間で助け合いをしている。

<sup>15)</sup> 生産隊時代の時の生活について、カルマタン村の漢族の女性SH氏（78歳）が大躍進・人民公社時代の飢餓状態について、泣きながら以下のように話してくれたことがある。

「小さいとき、ゲラの家の掃除とかをやっていた。そのとき衣食はゲラが提供してくれるので、お腹が空いたことはなかった。58年人民公社時代に入ってから、よくお腹が空いていた。一日中働くうえ、三食とも大食堂で提供される薄いスープしか飲めなかった。たまに、遅れてしまうと何も食べられなかった。」

<sup>16)</sup> 今でも、康楊郷の所有農地として、康家の人たちが農耕し続けている。

<sup>17)</sup> 牧畜地帯方言と農耕地帯方言を、西田（1987, 131）では遊牧地域の土語と農耕地帯の土語と呼び、西（1987, 185-190）では遊牧地区の方言と半農半地区の方言と呼んでいる。

<sup>18)</sup> カルマタン村のチベット族の言語使用についても述べておく。カルマタン村では4つの言語を有し、話し相手によって用いる言語を自由に切り替える村人もいる。したがって、チベット族の家庭内で使っているチベット語には漢語（漢語青海方言、以下同じ）が混ざっているかどうかをはっきりさせるため、65世帯のチベット族に対してアンケート調査を行い、それを基にして口頭調査も行った。その際、筆者は調査対象に機械的に「いつも使っているチベット語の中に漢語が混ざっていますか」と質問した。そのチベット族の回答結果は以下の表になる。

家庭内で使っているチベット語に漢語が混ざっているかどうか

漢語が混ざっていない	漢語が混ざっている
33世帯	32世帯

ほぼ5割のチベット族が家庭内で漢語が混ざっていないアムド標準チベット語を使っているという。彼らの選択について聞いたところ、10世帯は「漢語青海方言・漢語普通話是一言も喋れない」と答え、5世帯は「漢語が混ぜないように意識している」。他の18世帯は「我々が使っているチベット語

は村のチベット語だ」といい、漢語が混ざっているが、村の中ではチベット語と認識されているので、漢語の借用語が多からうが少なからうが何れも「チベット語である」と感じているらしい。

漢語を混ざっているというのは32世帯である。その中の25世帯のチベット族はいつも使っているチベット語に漢語が混ざっているといい、アムド標準チベット語はわかりやすいチベット語ではないと意識し、漢語混じりのチベット語を使わないと会話の意味が通じなくなるといふ。

他の7世帯のチベット族は、話し相手によって、アムド標準チベット語と漢語混じるチベット語（農耕地帯の低地方言）のどちらかをいうという。例えば、民族中学校に通っている子供はアムド標準チベット語で話すため、それに合わせてチベット語に漢語が入らないように意識することもある。しかし、教育を受けたことがない家族に対して漢語混じりのチベット語を使わないと通じないこともあるという。

以上の話から5割のチベット族の家庭が家庭内で使っているチベット語に漢語が混ざっていないといっているが、実際に意識して使っていないのは僅かの5世帯だけであり、残りの28世帯は漢語混じりのチベット語を使っていることが分かる。一方、家庭内で使っているチベット語に漢語が混ざっているというのは32世帯である。そのなかの7世帯は話し相手によって言語を切り替えるというが、学校に通っている子は小学校4年生から高校卒業まで寄宿生学校の教育を受け、家には休みの日にしか帰ってこない。そのため、日常家庭内で使っているチベット語は漢語が混ざっているものと理解して良いだろう。つまり、カルマタン村のチベット族家庭内では、アムド標準チベット語を使っているのは5世帯だけであり、60世帯がまだ漢語青海方言混じりのチベット語（農耕地帯の低地方言）を使っていることが分かる。

<sup>19)</sup> 第二世代の嫁はチベット族であり、漢語青海方言ができない。

<sup>20)</sup> 第一世代の祖父母と両親はすでに亡くなっているが、この表では王徳有夫妻の言語背景を明確にするため、祖父母と両親に対して使われた言語も表に入れてある。

## 参考文献

- 良煜・李咏梅（2012）、『青海方言与河湟文化』、青海人民出版社。
- チョルテンジャブ（2014）、「チベットアムド地域におけるルロ祭とその社会的な議論について」、『日本西藏学会々報』第60号、103-121。
- Dbang grags (2011), Mdo smad lho phyogs rma 'gram btsan rdzong gcan tsha yul gru'i sngon byung srid pa'i snying gtam, Kan su'u mi rigs dpe skrun khang.
- Dkon mchog bstan pa rab rgyas, Brag dgon pa (1982), Mdo smad chos'byung deb ther rgya mysho, Kan su'u mi rigs dpe skrun khang.
- ガザンジェ（2016）、『中国青海省チベット族村社会の変遷』、連合出版。
- 康楊鎮政府（2016）、『康楊鎮城郷居民基本医療保険参



保任務分解表』，康楊鎮政府。  
西義郎（1987），「チベット語の方言」，長野泰彦・立川  
武蔵編『チベットの言語と文化』，冬樹社，170-203。  
西田龍雄（1987），「チベット語の変遷と文字」，長野  
泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』，冬樹社，  
108-169。

Pad ma rdo rje (1989), *Dag yig gsar bsgrigs*, Mtsho  
sngon zhing chen zhin ha dpe khang.  
Snying lcags (2011), *Rma lho'i sa ming lo rgyus rig  
gnas brda 'grel*, Kan su'u mi rigs dpe skrun khang.  
Zhang Yisun (2010), *Bod rgya tshig mdzod chen mo*,  
Mi rigs dpe skrun khang.

## Abstract

### Language Situation of Han Chinese Families in Amdo Tibetan Area: A Case of the Wang Deyou's Family in Skarmathang Village

Zhou Yang Cuo

Ph.D. Candidate

Graduate School for International Development and Cooperation, Hiroshima University

1-5-1 Kagamiyama Higashi Hiroshima, 739-8529 Japan

zhouyangcuo@yahoo.co.jp

This paper focuses on the current language situation of Han Chinese Families in Amdo Tibetan area, China. The analysis is based on a Han Chinese Family named Wang Deyou of a Tibetan Village.

The Skarmathang Village is located in Huang Nan Tibetan Autonomous Prefecture, Qinghai Province. Tibetans mainly live in this village while people of Han nationality mix with Tibetans in the local area therefore, This place is called the “Tibetan Village.” The Wang Deyou's family is a good example of a family that speaks the following three languages: Qinghai Dialect, Mandarin, and Amdo Tibetan, and Wang Deyou's Family is ethnically considered a Han family. These three languages have been passed down from generation to generation. This paper is aimed at clarifying how these languages are handed down in that family. Mr.Wang Deyou and his family have been living in Tibetan Village from Xining Basin in 1918. In daily life they use the three languages mentioned above. The language they choose to use at any given moment is decided according to the situation.

Mr.Wang Deyou's mother tongue is Qinghai Dialect and his wife's mother tongue is Amdo Tibetan. Their son, the second generation, born in Tibetan Village and having attended ethnic schools, is fluent in the three languages mentioned above. The eldest son's wife is from a Chinese Village, and she cannot speak any other language except the Qinghai Dialect. And the third generation's mother tongue is Qinghai Dialect because of their mother, but they also can speak fluent Mandarin.

As can be seen in Mr.Wang Deyou's family's case, it is very common to see these kinds of changes in language situations of a single family in Amdo Tibetan Area.